1994-4-1/8

1994-4

私の大学選びと学生時代

ぼくの大学論

「セリオ」では、今までに登場してくださった先生方に
アンケートをお願いして、学生時代を振り返っていただきました。
どんなふうに大学・学部学科を選んで、どんな思い出があるのでしょうか。

『セリオ』通巻23号（94年3月号）pp. 22-27　増進会出版社

◆橋爪大三郎◆
東京工業大学助教授。
1972年、東京大学文学部社会学科卒業。
専門は宗教社会学。

Q 進路を決めた時期、またその大学・学部・学科を選ばれた理由を教えてください。

◆橋爪大三郎◆（社会学）
高校一年の時、社会学の本を図書館で探して読んだら面白そうだった。

Q ひとことで言うと、どんな大学生でしたか。

◆橋爪大三郎◆
ちょうど紛争でもあり、教室にはあまり出なかった。本はよく読み、議論もした。

Q 大学時代の感動的なエピソードを、ひとつ教えてください。

◆橋爪大三郎◆
自決する前の三島由紀夫が駒場にやってきて、九〇〇番教室で学生と議論した。

Q 大学時代、勉強以外に打ち込んだものがあれば、その内容を教えてください。

◆橋爪大三郎◆
サークルで芝居をしていた。

Q 大学時代は、今の自分とどのようにつながっていると思いますか。

◆橋爪大三郎◆
いま考えているようなことは、たいが い当時考えていた。

Q 自分にとって大学に行ったことのメリットは何ですか。また、デメリットがあるとすれば何だと思いますか。

◆橋爪大三郎◆
専門のトレーニングを積む機会と仲間が得られたのはよかった。しかし授業は、時間の無駄だった。

北日本新聞　1994年(平成6年)1月15日　土曜日

きょうのくらし

「教授会の自治」解体を

東工大助教授・橋爪大三郎さんに聞く

十八歳人口が一昨年をピークに急減、大学はいよいよ〝冬の時代〟に入った。どの大学も生き残りをかけた改革に懸命だ。しかし、いろいろな利害が対立、掛け声だけで一向に前に進まないのが実情のようだ。「教授会の自治」の解体など思い切った改革案を唱える東京工業大助教授の橋爪大三郎さんに聞いた。

大学改革のためには、日本人が大学について抱いている誤ったイメージを根本的に改めなければならないと、橋爪さんは言う。

「大学は小、中、高の上にあり、それをうんと難しくしたものと考えるのは間違い。全く別の原理で動いています。読み・書き・そろばんの延長ではなく、純粋な知的関心に基づき、物事を徹底的に探究する場なんです」

日本の大学といえども、日本人のためだけに存在するわけではない。

「大学は国際機関。国際的な知のネットワークの一角です。日本語だけが通用する場であっては困る。外国人も英語という共通語で勉強や生活ができる所、例えば大使館とか租界のようなら、日本でありながら日本でない場所と考えてほしい」

橋爪大三郎さん

学問疎外する大学の惰性

「教授会が予算とポストの配分権を握り、年功序列が幅を利かせる。自民党の派閥そっくりですよ。だからいったん教授、助教授になれば、後は安泰。競争原理は働かず適材適所は抑圧される。もっとも出世のための競争はたくさんあるが、これは学問とは関係がない」

しかし、「教授会の自治」は「学問の自由」のため、つまり政治権力など外部の圧力から大学を守るために重要な役割を果たしてきたのではないか。

「学問を疎外するものが国家や政治権力である時代は去ったんじゃないですか。学問の自由は、ろくな研究も教育もしないで無駄飯を食い、後進の道を邪魔する自由ではないはず。今、学問を疎外しているのは大学の惰性そのものですよ」

惰性を打破するには、競争原理を導入して、実力のある人を、それにふさわしい条件で迎え入れる仕組みが必要だ。例えば教員のポストを二年契約、三年契約といった年限制にすることも考えられる。

競争原理の導入が急務

「研究職は本来リスキーな職業。それくらいの緊張感があった方がいい。改革には当然、痛みを伴う。しかしそれを恐れていては、日本の大学は先細りするだけです」

国際化を目指して大学の組織改革を進める上で障害になるのが、「教授会の自治」と呼ばれる独特の組織運営方法だと橋爪さんは指摘する。

国際的には日本の大学は二流、三流としか見られていない。世界に向けて何の情報も発信していないからだ。

1994-4-2/8

性・言語・権力

不在の身体との関係

社会の出発点には「言語」が必要

橋爪大三郎氏に聞く

<1面からつづく>

――今回の『コレクション』は三巻に分かれていて、一巻が『身体論』、二巻が『性空間論』、三巻が『制度論』となっています。三巻を通してのベースは身体ですね。

橋爪　そうです。

――社会理論において身体を出発点に選ばれたのはなぜですか。

橋爪　いま言ったことの流れで言えば、人間の思考や行動はパターン、すなわち形式でできている。そして、それが疎外されたものでも何でもなくて、まさにそこに最低レヴェルのリアリティがあるから、そこから記述が出発するというのはその通りだと思います。しかし、言葉や行為のパターンはそれ自体で存在しているわけじゃなくて、いつも生まれたり消えたりしている。パターンとパターンとの関係や、パターンが生まれたり消えたりする現象を考えるためには、どうしても押さえておかなければならない場所があります。それが身体なのです。

身体というのは不思議なもので、完全に客観視できない、客体ですけれども。また、完全に主観的なものと捉えることもできない、主観ですけれども。ですから、身体はそれ自身として述べるのがなかなか困難な事実です。私はそこを巧妙にずらせないかと考えた。私が意識を持っていることを根拠にして身体を記述すれば現象学になってしまいますが、そういうこともしない。それから、身体というものがありましたと、自分と無関係な視点を設定して客観主義をとることもしない。とりあえず言葉と言葉との関係において身体を定義できないだろうかと考えて、そこを暫定的な出発点としたわけです。

――橋爪さんの社会理論を考える上で重要な概念として「ダブル・リアリティ（二重の現実性）」という考え方があります。現象学的なリアリティと唯物論的なリアリティと呼んでおられますが、これを簡単に説明していただけますか。

橋爪　客観／主観という言葉がありますね。でもその言葉はなかなか使いにくい。どうしてかというと、現象学の中にも客観と主観というのがあるんですよ。唯物論の中にも客観と主観という言葉がある。伝統哲学の中にはその二つの言葉しかないと思うんだけれど、しかし現象学が言っている客観や主観と、唯物論が言っている客観や主観とはずいぶん違うんじゃないか。そこで、この言葉づかいは正確でないかもしれないから使わないようにしよう、と。

すると、新しい用語系によって、現象学みたいな考え方と、マルクス主義みたいな唯物論の考え方との関係を説明しなければならなくなる。そこで、現象学的リアリティ、唯物論的リアリティという言葉づかいになったわけです。

――社会を考える上では「ダブル・リアリティ」を考慮に入れない限りだめだと書かれています。これは、それ以前の社会学の議論の立て方に対する一種の批判でもありますね。

橋爪　こういう順序で簡単にまとめておきましょう。まず、客観主義が社会学では主流ですから、それについて述べます。社会学は人間の行為に注目し、行為から社会が成り立っていると考えていくんですね。ところで、行為を記述するためには、どうしても行為の意味を問題とせざるをえなくなる。では、意味とはどこにあるのか。観察者の中にあり、行為する本人の中にもある。両者の関係はどうなっているか。こういうことが問題になってくる。ウェーバー自身もこのことを問題にしました。

こうなるともう、単純な客観主義の手に負えない。意味は完全に客観的に立てられる概念ではないんです。では、意味はどうやって説明すればいいのか。ここでどうしても客観主義を超える論理を持ち込まざるを得なくなる。それだったら、初めから客観主義を標榜せずに、意味そのものが公共的に存在するという前提から出発した方がいい。この前提は、客観主義的な前提ではなくて、一種の約束（公理）という性質を帯びると思います。

――それが「言語」ということになるわけですね。

橋爪　そうです。

――橋爪さんは、「言語こそ社会の社会たるゆえんそのもの」だとおっしゃって、<言語派>社会学を標榜されていますね。

橋爪　人間以前の存在、たとえば類人猿を考えてみますと、生理的身体の構成は人間とほとんど同じなんですね。でも、人間のような社会をつくってはいない。どこが違うかが問題です。男女の性関係の中に違いがあるかというと、違いはあるんですね。構造主義が近親相姦の禁止という形で発見したもので、それが織り込まれた男女関係であれば結婚とか家族とかいう水準になっている。でも、それだけだろうか、と。性関係は、目の前にオスとかメスとか相手がいた時に成り立つ関係ですけど、社会がそういう関係とその複合だけでできているとはとても思えない。人間の能力は、遠くにいて不在である他者たちと、ありありと現実的な関係を結べるところに大きな特徴があります。

だから、身体の相互関係のあり方が動物と人間では大きく違うわけです。それは、<遠隔対称性>として性から派生するものではなくて、性と独立に一つの能力として人間に具わった、不在の身体と関係する方法なんですね。それが人間にどういう能力として具わったかというと、言語である。言語という要素がつけ加わった時に、人間の相互関係、身体と身体の関係は質的に変化したんだと思います。ですから、社会の出発点には、性と独立に言語というものが必要なんですね。

――橋爪さんの場合には、性の問題を扱う時に、フロイト流の欲望論ではなく、近親相姦の禁止が重要な意味を持っていますね。

橋爪　近親相姦の禁止を欲望で説明するのは難しいと思います。フロイトの説では、近親相姦が禁止されるのは近親に対する強い欲望があるからだと言いますが、そうすると、欲望の反対物としての禁止がどこから出てきたのかが問題になり、それは父親に帰責されます。では父親はどうやって禁止を獲得したかと、無限遡行になっていかざるを得ない。最終的には、ハーレムみたいにすべての女性を独占している父親がいて、それを殺害して兄弟たちが女性を分けあい、道徳と倫理を作りましたという神話になってしまうわけです。

欲望だけでなく、禁止も人間に内在していると考えなければ、さっきみたいな神話にならざるを得ない。私が性を考える時に、性と独立した人間の根源的能力を考えなければいけないと思うのはそういう理由です。近親相姦の禁止や家族やそれ以外の社会関係を考えていく時に、エロスとか欲望とかではなく、記号に対する自己同一性のようなものの、言葉を話す喜びみたいなものも人間に内在していると考えるのが必然ではないかと思ったわけです。

――『コレクション』の中で、目指すべき『記号空間論』の構成要素として、自然力と性と言語と権力を挙げておられます。権力の問題についてはどうお考えですか。

橋爪　権力は、性とか言語とかとはちょっと違って、実体的に存在すると主張できるものではなく、一種の効果として社会の中に具わっていくものであると思います。権力があると人々が信じることによって権力が実在し始める。権力の定義の中に権力が含まれているわけです。

では権力の作用は、その外に権力と別の根拠を持つのかどうか、この点が次に問題になります。権力が権力以外のものに根拠を持つと考えるならば、欲望論になるか、レーニンのような原初的暴力論にならざるを得ない。けれど、それはまずい。権力は権力の外に根拠を持たない。だから権力として自存しているんだろうと思うんです。そうすると権力を定義するのに、人々の権力についての知識を前提とせねばならず、権力の出発点を端的に語ることができない。そこで権力の定義は、権力の性能によって与えることしかできないだろうと想像されます。

しかし、権力の性能を記述しようと思うと、どうしても自己言及的にならざるを得ないのです。権力とは権力として機能しているものである、と定義すれば権力なんですけれど（笑）、これではあまりに自己言及的であって、社会的に権力として現実化していくところを記述するのに十分でない。そこをいま考えているところです。

――権力は悪だという一般的な了解に対して、果たして権力は悪なのか、と疑問を投げかけておられますね。

橋爪　権力が悪であるとは言えません。欲望論から出発して、欲望を権力が抑圧してしまうと考える。欲望を基準にして権力は悪ですね。それから、道徳とか正義とかがアプリオリにあって、権力はそれをねじ曲げてしまうと考えるから権力は悪ですね。

しかし、いま考えたように、権力は社会に付随する本質的な効果であると考えるならば、その効果は、大勢の人々が同じことを考えるという点に帰着すると思うんです。権力があるということは、誰が考えたかわからないことなんです。その結果、皆が同じことを考え、同じ行動をとってしまう。このことは社会の中では必ず起こっていることで、これ自身が悪であるとは言えない。悪というのは、権力が実際に制度化されて派生形態を生じた時に、権力と独立な言説が生まれて、その言説の中で権力が悪であると主張したり、証明できる時に初めて成り立つ現象で、権力の本質的な定義とは関係ないと思うんです。

――フーコーの権力論についてはどうお考えですか。

橋爪　フーコーは権力を客観的に扱う実証法を発見しました。それが「考古学」にもとづく権力分析ですが、それは権力の作用の痕跡を実証していく。権力が実証できれば、そこに権力があったことになります。しかし逆は言えないのであって、権力があれば必ずそれが実証できるかというと、その保証はないんですね。これが、私がフーコーにあんまりついていかない理由です。

フーコーの研究方法をとるならば、権力を実証できそうな場所を研究対象に選んで、そこで権力の実証をやらざるを得ない。そのかわり、権力に対する一般論や、実証できそうもない権力について何かを考えることは非常に難しい。特に現在作用している権力、自分に作用している権力について考えることは難しい。なぜなら、権力の定義によって、権力が自分に作用しているとするならば、その効果が自分に現れて自分が発する言説をねじ曲げてしまうわけですから、そのことを自分が語ると、自分は嘘つきであるというパラドックスと同じ状態を生んでしまい、学問にならなくなってしまう。フーコーはそういうことを巧妙に避けていると思います。それは権力についての深い理解だけれども、権力論ではない。権力を実証する手続きである、と私は思います。

――『コレクション』に収められた論文は、『記号空間論』の準備稿に当たるわけですが、本論の方の『記号空間論』の作業は進んでいますか。

橋爪　あまり進んでいませんね（笑）。一番の問題は権力についてさらにどこまで進んで考えることができるかということですが、少し使えそうな数学と接触できたように思うので、それをマスターしてやってみたいと思います。やってみたらスカだったということもあるかもしれません（笑）。そうしたら、またしばらくモタモタするでしょう。

（おわり）

橋爪　大三郎氏

☆はしづめ・だいさぶろう氏は東京工業大学助教授・社会学専攻。東大大学院博士課程修了。著書に「言語ゲームと社会理論」「はじめての構造主義」「現代思想はいま何を考えればよいのか」「民主主義は最高の政治制度である」など。一九四八（昭和23）年生。

権力の本質的な定義

一種の効果として具わっていくもの

誠実評価・御報即参上
古本買入
大雲堂書店
〒101 千代田区神田神保町1-9 TEL(3294)0616～7

1994-4-3/8

性・言語・権力

『橋爪大三郎コレクション（全3巻）』をめぐって

橋爪大三郎氏に聞く

社会学者の橋爪大三郎氏の初期の論文が、『身体論』『性空間論』『制度論』の三巻にまとめられた。収録された論文はいずれも、〈言語派〉〈社会学の集大成となるべき『記号空間論』の準備稿として書きつがれた論文である。準備稿とはいっても、一篇一篇の完成度は高く、橋爪社会理論の壮大な構想をうかがわせるに十分な質と量を備えている。この『橋爪大三郎コレクション（全三巻）』の刊行を機に、橋爪氏に話を聞いてみた。（編集部）

橋爪　大三郎氏

――『橋爪大三郎コレクション（全三巻）』に収められた論文を書いていた当時の、橋爪さんの生活などをお話いただけますか。

橋爪　私が大学院に入ったのは、一九七二年です。実は入ってみるまで、大学院が五年間あって、修士と博士に分かれているということすらよく認識していなかった（笑）。のんびりしたもので。そこを七七年に修了するわけですが、私の論文は『コレクション』をお読みになればわかるけれども、普通の社会学っぽくない。就職論文向きでないわけです。でもまあ、しょうがない、書きたいことをますます書いていこう、という感じでした。

大学院を修了するころに、ちょうど折よく学術振興会奨励金という制度がありまして、当時で月に十万円弱ぐらい、今の感覚だとその二倍ぐらいでしょうか、もらえて自由に使えたので、その年はかなり時間ができました。せっかくのいい条件だから、月に一本論文を書こうと決めまして、その年はそのペースで書いていったわけです。

――その頃は、ほとんど読書と執筆という毎日だったわけですか。

橋爪　読書はあまりしなかったような気がします（笑）。当時は夜型で、東京に週一、二回出るわけですが、それ以外は、のこのこ昼過ぎに起き出して、日中の仕事は片づけて、だいたい八時、九時頃から、明け方まで仕事をする。そうするといろいろといいことがあって、まずテレビはやっていないし、電話もかかってこない。誰にも邪魔されない、まったく自由な時間ですね。

――卒論では国家論を、修論ではレヴィ＝ストロースをテーマにされましたが、レヴィ＝ストロースを選ばれたのは？

橋爪　当時、筑摩書房から出ていた『展望』という雑誌の一九七〇年十二月号だったかに、吉本隆明さんの「南島論」という論文が掲載されて、その中にレヴィ＝ストロースのことが紹介されていました。非常に重要な業績なんだが日本の学者は誰も紹介していない、けしからん、早く翻訳しなさいみたいなことが書いてあったんです。それが頭の隅に引っかかっていた。私は大学院を一度すべって、一年間、文学部で「五年生」をやっていましたが、ちょっと夏が暇だったものですから、レヴィ＝ストロースを読んでやろうと思って、読んだら非常に面白かった。大学院に入ってテーマを決めるときに、じゃあこれでもやってみようかと思ったわけです。

――当時、レヴィ＝ストロースの評価はどうだったんですか。

橋爪　大学院の文化人類学の講義なんかに出ておりますと、彼らはプロですから、だいたいのことは紹介書や原著を通じて知っていたようですね。ただ、フランスの学者と、当時も主流だった英米系の人類学とはソリが合わなかったとみえて、レヴィ＝ストロースの評価は高くなかったですね。私は、英米系の議論なども勉強しながら、それですっかり面白いんだけれど、選べてもきちんと引き合う場合がある。兄／妹（姉／弟）の関係がそれですけど、こういう構成が保たれて政治的に機能するようになると、卑弥呼とその弟みたいな政治権力ができ上がる。――これが吉本さんの考え方ですけれど、よく調べてみると論理的に整合しなかったり、証拠と合わなかったりするところがあって疑問に思ったわけです。少なくとも、レヴィ＝ストロースの考え方とはずいぶん違う。吉本さんのように疎外論によって天皇制論や国家論を組み立てるのは、ちょっと無理じゃないかと考えて、それで書いたわけです。

――いま、疎外論の話が出ましたが、この『コレクション』の中でも、疎外論や物象化論に対する批判が出てきます。批判の要点はどこにあるのでしょうか。

橋爪　新左翼というのがありましたね。全共闘とかみんなそうですけど。新左翼を定義してみると、日本共産党とかスターリン主義とか、現実に成立している社会主義の勢力とは距離をおく。なぜならば彼らは正しくないから。じゃあ正しさの規準はどこにあるかというと、マルクスとか、弁証法とか、疎外論とか、そういう考え方の中にあって、その通りにきちんと見ていけば世の中は見えるんだけれど、政治主義的に歪められて正しくなくなると体制になってしまう。そこで、資本主義のみならず、社会主義の側のスターリン主義や日本共産党のようなあらゆる体制にも反対して、独自の運動を作っていかなければいけない、となるわけです。根本は疎外論であり、物象化論なんですね。

疎外論の枠で考えていくなら、論理的帰結として全共闘・新左翼にならざるを得ない。だけど全共闘・新左翼の運動はまったく展望のない運動になっていて、どこかが間違っている。どこが間違っているかと言えば、それは疎外論ではないかと思って、それでそこを気にしているわけです。

――疎外論では、その問題構制上、疎外されざる本来的なものを前提とせざるを得ないわけですが、それに対して、そんなものはない、と。

橋爪　そうです。廣松渉さんの場合だったら、人間が言葉を使ったり記号を使ったりするのはすでに疎外の表れですね。吉本さんの場合でも、人間が観念を持ったり言葉をしゃべったりするのは疎外の表れです。〈原生的疎外〉とか、微妙な言葉がいろいろあるのだけれど。でも、それを疎外とよび、原点からずれた状態だと記述する必要は全然ない。だって、それ以外に人間のあり方はないわけだから。それはもう人間そのものではないか。だったら、それをストレートに出発点においた方がいいと思ったわけです。

――構造主義の話に戻りますが、『コレクション』に収められた論文を読みますと、明らかに構造主義を通過してきた人の視点が入っていますね。

橋爪　それはそうでしょう。大学院の頃、ちょうど丸山圭三郎先生が東大で講義をしておられました。内容はソシュールの原典解読で、のちに『ソシュールの思想』としてまとめられた内容のラフ・スケッチを学生さんに原文で配って、ああだこうだと議論していく。そこで、言語学的な観点からする構造主義はじかに教えてもらって身についたような気がします。

それはいいんだけれど、構造主義の一番の難点は社会学にならないということです。

――どうしてですか。

橋爪　構造主義というのは、どうしても人間の思考のパターンに関心を集中していくわけです。記号や言語がそうです。しかし社会は、思考のパターンからできているわけではなく、一人一人の人間から、誰それという顔の見える具体的な関係でできている。質感（マチエール）のある、物の側面があるんです。そういう側面は構造主義では説明できない。

親族研究には、パターンの側面と物の側面と両方があります。だけど神話学では、物の側面は希薄になって、パターンの側面だけになる。レヴィ＝ストロースがそちらに引きつけられていったのは、構造主義者として当然だと思います。でもそれでは、もう一つの物の側面はどうなるのか。それで私の前に、社会関係の中で物を物として扱う学問、すなわち経済学が大きく浮かび上がってきました。

2面へつづく

構造主義を通過して

修士論文ではレヴィ＝ストロースをテーマに

◆橋爪大三郎コレクション①身体論②性空間論③制度論、四六判・平均三三〇頁・各三〇九〇円・勁草書房

日本古書通信
誌歴59年　趣味と実益の読書雑誌
1カ月 600円（送51円）・1年前金 7,200円（送共）
〒101 東京都千代田区神田小川町3－22
見本誌進呈
電話 03(3292)0508　日本古書通信社

1994-4-4/8

もう一つの反体制

崔健（ツイ・ジェン）・北京のロックンローラー

橋爪大三郎

はしづめ・だいさぶろう　東京工業大助教授。社会学専攻。昭和二十三年、神奈川県生まれ。東大文学部卒、同大学院修了。著書に『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『橋爪大三郎コレクション』（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）などがある。

しばらく前まで、中国のロックの話をすると、「中国にロックなんてあるの？」という顔をされた。最近は中国を紹介するテレビも増えて、さすがにそれはなくなったが、それでも中国のロックがどんなものなのか、なかなかわかってもらえない。そこでこの場を借り、改革開放下の中国のロックをめぐる最近の状況について、簡単にお話ししよう。

＊

グラスノスチ（情報公開）からスタートしたソ連と違って、中国の改革開放は、経済が先行している。共産党の一党支配は相変わらずだし、テレビ・新聞といったマスメディアも、党にコントロールされたままだ。

一九八九年に鄧小平の指導する改革開放政策がスタートしてから、中国の人びとは、それまで禁止も同然だったポピュラー音楽（中国語では「流行音楽」）を、再び口ずさむことができるようになった。各地の民謡やナツメロ、青春歌謡、テレサ・テンから香港・台湾のヒット曲まで、あっという間に、人びとの生活の一部になっていった。

それでも、「流行音楽」とロック（中国語で「搖滾」やおぐん」）とのあいだには、厳しい一線がひかれている。テレビは原則として、ロックを放送しない。北京では、大きめの会場でコンサートを開くのもむずかしい。ポピュラー音楽とロックをどうやって線引きするのかわからないが、とにかくロックは「ブルジョア腐敗文化」の扱いなのだ。

こんな状態なので、中国のロックは筋金入りである。その先頭を切っているのが、崔健（ツイ・ジェン）だ。去年から今年にかけて彼のアルバム「一無所有」「解決」がわが国でも発売になり、ファンが急増している。十月五日には最新アルバム「紅旗下的蛋」（ボールズ・アンダー・ザ・レッド・フラッグ／TOCT－8571、東芝EMI）もリリースされる。彼に続いてここ数年、黒豹、唐朝をはじめ、一九八九、自我教育、眼鏡蛇、紅色部隊などといったロック・バンドが北京に続々台頭してきている。

＊

崔健という注目すべき才能について、もう少し紹介しよう。

彼は一九六一年の生まれで、文革世代よりはちょっと年下、中国のシンガー・ソングライター第一号だ。オーケストラでトランペットを吹いていたが、八四年ごろたまたま聴いたロックのテープに感動、作曲とアマチュア・バンドの活動を始める。八六年に自作の「一無所有」（俺には何もない）が爆発的にヒット、オーケストラも辞め、以来プロのロックンローラーとして中国の音楽シーンをリードし続けている。

彼の作品は、ロックだが、ロックの枠に収まらないほどスケールが大きい。チャルメラや琴といった伝統楽器を加え、音色に厚みを出す。ジャズやラップの感覚を中国の伝統芸術の技法とミックスする。現実に鋭く踏み込んだ歌詞が、聴く者をドキリとさせる。海外での評価も高く、九月にはアメリカ、十月には日本で初めてのツアーを行う予定だ。

＊

崔健の音楽は、伝統文化と現代文明、社会主義と市場経済のはざまで揺れ動く中国民衆の、心の奥底を唱ったものだ。そのスタイルは、最近元気のよい中国映画と一脈通じるところがある。

共通点の第一は、中国のルーツ（具体的には陝西省北部―西北）への注目。陳凱歌監督の「黄色い大地」（八四年）は、この地方の民謡を採集に行く紅軍の兵士の物語である。東方紅など解放軍の歌は、この地の民謡がベースだ。張藝謀監督の「紅いコーリャン」（八七年）も、野太い歌声の挿入歌が印象的だった。音楽を担当したのは趙季平。崔健と並んで「西北風＝しーぺいふぇん」ブームの火付け役である。八八年、私が最初に訪中した当時は、このブームのまっ最中で、香港・台湾の音楽が万里の長城にどどっとはね返されて来たような、力強いポップスが育っていることに感銘を受けたものだ。

第二は、外国（欧米文化）を強く意識していること。陳凱歌はアメリカでの生活が長かったし、崔健のまわりには外国籍の友人が多い。欧米の動向をいち早くキャッチしつつ、それが中国の現実にどのような意味をもつかを考えぬく。崔健のロックも中国映画も、そういう同時代の緊張を感じさせてくれる。

実際、中国で映画・音楽・文学・美術・演劇……の先端をゆく人びとは、地下水脈のようなネットワークを保っているようだ。陳凱歌監督をインタヴューしたとき、特に名をあげて崔健はいいと語っていたし、最近私が崔健からもらった「今日先鋒」というアヴァンギャルドの文芸雑誌には、崔健や陳凱歌ら約二十名が編集委員に名を連ねている。

＊

今年の二月、私は北京で崔健をインタヴューすることができた。その内容は、『崔健――激動中国のスーパースター』と題して十月に出版の予定だが（岩波ブックレット）、彼がロックにこめる思いを率直に語ってくれたのが印象に残っている。

今度のアルバム「紅旗下的蛋」では、よりストレートに現実を描くことで、金がすべての世の中で空虚な感覚を抱く中国の若い人びとに、その先を考えてもらいたかった、と彼は言う。

《赤旗はまだひるがえり、くるくる向きを変えている／革命はまだ続いていて、老人たちは力を増している》（「赤旗の下の卵」）、《俺の理想は、あの／あの旗に包まれた箱／中略／旗は鮮血で真赤に染まっている／だから勝利者は赤い色を好むのだ／中略／とって返して、あの箱めを叩きつぶせ／中略／あの勝利者に、間違ってると言ってやる／とっくに事情は変わったぞと言ってやる》（「箱」）。後者の曲の歌詞を、香港版のCDでは載せないことにしたという。中国のロックをめぐる状況には、まだまだわれわれの想像を超える厳しさがあると言えよう。

平成6年（1994年）9月17日　土曜日　産経新聞　夕刊

1994-4-5/8

1994年(平成6年)7月8日　金曜日　朝日新聞（夕刊）　第3種郵便物認可

躍動するアジア音楽、日本への刺激に

社会学者　橋爪　大三郎さん

第二次世界大戦後、世界のポピュラー音楽には二つの大きな動きがあった。一つは一九五〇年代に始まる英米ロックの隆盛と各国固有のポピュラー音楽の「ロック化」。もう一つは八〇年代後半からの非欧米世界のポピュラー音楽がもたらした、いわゆる「ワールド・ミュージック」の波だ。

ワールド・ミュージックとは、狭義には従来「エスノ・ポップ」などと呼ばれてきた非西欧のポピュラー音楽を指し、その世界市場への紹介・商品化の動きをも意味するが、広義には、クラシックもロックもアフリカのポップスも、すべてをある特定の時代と地域を背景に生まれた等価の音楽として位置づける、新しい価値の枠組みを意味する。

欧米中心主義の崩壊に呼応

ロックの波は、先進諸国による世界政治と経済の管理、欧米的価値観の普遍化、メディアの発達に伴う世界の均質化などと対応する音楽上の出来事だった。同様に、ワールド・ミュージックの波は、現在も進む第三世界の台頭、民族運動の活発化、欧米至上の価値観の崩壊と呼応している。世界規模の「歌は世に連れ」だ。

社会学者の橋爪大三郎さんはワールド・ミュージックを、思想的にはポスト・モダニズム、政治的にはポスト冷戦に呼応するものとしてとらえる。

「ポスト・モダニズムは一言でいえば価値の相対主義。伝統的な欧米中心主義へのアンチテーゼです。また冷戦の終結は、資本主義から社会主義を経て共産主義へという歴史の大きな矢印の物語を崩壊させた。『進んでいる』『遅れている』といった評価の尺度がなくなり、市場経済という最低限のルールの中で各国・各民族が多様な経済や文化を勝手に発展させるという構造を生み出した。ワールド・ミュージックの提示する音楽の相対主義は、そうした時代に感性のレベルで対応するものです」

従来、英米の音楽はアフリカやラテンの音楽の要素を取り込むことで活性化を図ってきた。第三世界の音楽は補完物か、主流にとって代わるオルターナティブ、またはカウンターカルチャーとして扱われてきた。だが、すべてを等価値と見るワールド・ミュージックの相対主義はそうした二項対立の構図を解消した、というのが橋爪さんの見方だ。

音楽評論家の中村とうようさんは、「成熟・疲弊した西欧」対「未成熟で活力ある第三世界」という構図も否定する。第三世界はフランツ・ファノンのいう「民族文化形成期」を過ぎてとうに成熟を迎えており、この地域の歌謡が次の世紀の音楽を支配するとして、「大衆音楽におけるワールド・ミュージックのベクトルとは、実はアジア歌謡によるヨーロッパ、アメリカ音楽の駆逐の方向性である」という。国際政治・経済の世界での南北問題に似た構図が、音楽の世界にもある。

中国のロッカー崔健

はしづめ・だいさぶろう　一九四八年神奈川県生まれ。東大大学院博士課程修了。八九年から東京工大助教授（社会学）。

二人がともに重視するのがアジアの音楽だ。橋爪さんはこの何年か、中国のロッカー崔健（ツイ・ジェン）に注目している。アルバムの歌詞を訳し、北京に飛んでインタビューもした。「日本の音楽の閉塞（へいそく）状況を救えるのは彼の音楽だ」との考えからだ。

ロックの波は、カンツォーネ、ファド、サンバ、タンゴといった各国固有の音楽を圧迫し、衰退させた。シャンソンのように行政が保護に乗り出した例さえある。だが日本では逆に、「和製ポップス」から「ニューミュージック」まで、国産ポピュラー音楽が次々に生み出され、国内市場での比率を高めた。

異常に高い自国製品シェア

「この十五年、音楽市場の自閉的傾向がますます強まっている。ヒットチャートには外国曲はほとんど入ってこない。邦楽がバタ臭くなって洋楽を吸収したと考えられているが、外国ではまだ通用していない。世界共通規格でない自国製品のシェアが異常に高いという点で、日本の音楽はパソコン市場に似ている」

この動向を橋爪さんは、戦後の日本の対米意識の変化と重ね合わせる。

「かつて日本人の意識には、農村→都会（東京）→外国（アメリカ）という三段階の価値構造があった。ところが、都市と農村の対比の構図が薄まると同時に、アメリカの求心力も色あせていった。経済成長と円高を背景に、日米の経済均衡が成立したのと、日本の若者がアメリカのポップスを忠実に追いかけなくなったのは、ほぼ同時期です」

海外の音楽の比率が低く、海外でヒットする日本の音楽もほとんどない。ポピュラー音楽の世界でも「孤立する日本」なのだ。

「ワールド・ミュージックの相対主義とは、異種の音楽が相互に流通・影響し合うという相互主義でもある。その点では日本はまだ冷戦時代の段階にある」

その状況打開のカギとなるのが、アジア、とりわけ中国の音楽だと、橋爪さんはいう。

「中国ではポピュラー音楽は自由や新しい世界の象徴として新鮮な魅力を持っている。いわば音楽以上の意味を託されている。その象徴がロッカーの崔健。彼の歌は現代の中国の大衆心理に掘られた最も深い井戸です。彼はそこで掘り当てたものを歌うことをためらわない。そして大きな支持を得る。いわばロックの原点です。それが世界の市場でも高く評価されている。こうした音楽との交流を深め、アジアの音楽と相互に刺激を与え合うことで、日本の音楽は閉鎖性を打ち破ることができるのではないか」

（篠崎　弘）

朝日新聞　1994年(平成6年)5月8日　日曜日

中国　官僚天国

王　輝　著

評者・佐和　隆光

中国天津市の行政職幹部を歴任し、目下、天津社会科学院院長をつとめる社会学者が、自らの「経験」に基づき中国官僚制を素描したうえで、社会学の「理論」を駆使して「官僚病」の病因を探り、その処方せんを提示する、痛快きわまりない読み物である。

官僚たちが文山（中身のない書類の山）に遊び、会海（無意味な会議の海）にもぐり、「官本位制」がすべてを覆いつくすというのは、日本にもみられる通弊のようだ。とはいえ著者は、中国の「官僚病」の病因を中国に特有な「閉鎖的保守的な小農経営と、儒教的な専制の土壌に育（はぐく）まれた封建主義文化」の残存だと診断する。官僚病の有効な治療法とは、改革開放を徹底的に推進すること、「人治」の体制を「法治」の体制に、一言堂（ツルの一声）を群言堂（自由な言論による意思決定）に置き換えることだという。

本書の原著の刊行以来五年余りを経たわけだが、その間、中国における改革開放路線の推進には実にめざましいものがあった。さてそれでは、著者の予想どおり、中国の官僚病は快方に向かったのだろうか。本書の補記によると「経済改革の進み具合とくらべると、いかにもその歩みはたどたどし」かった。過去五年間に起きた中国の官僚制にまつわる変化としては、次のようなものが挙げられる。第一、下海経商（官僚が民間に移籍してビジネスに励む）が流行し、官本位制は確かに崩壊しつつある。第二、役人の「膨張病」が好転したわけではないが、行政府の機構改革は進行中である。第三、役人の定年制が完全実施されるようになり、能力査定が厳しくなり、若返りと専門家登用への道がひらけた。第四、相変わらずの「文山会海」ではあるが、改革開放の妨げになる文書の整理が進行した。第五、役所の腐敗は一段と深刻化したが、その一方で反腐敗闘争もまた本格化した。以上のような次第で、中国の官僚病の克服は、遅々とではあるが着実に進行しつつある、と著者はいう。

病因と処方せんを社会学者の目で探る

昨今、わが国でも官僚批判の声がかまびすしい。だれもが総論賛成の行政改革は、関係省庁による各論反対の前にあえなく頓挫（とんざ）を繰り返す。日本の「官僚病」を根治するための処方せんにも、同じく「改革開放の推進」と記されてしかるべきなのである。

（橋爪大三郎ほか訳、岩波書店・2225・1,600円）

ワン・フイ　30年中国天津市生まれ。中国社会学会副会長なども務める。

1994-4-6/8

毎日新聞（夕刊）（第3種郵便物認可）

躍進する中国と世代ギャップ

拝金・享楽主義批判をする崔健の音楽

橋爪　大三郎

今年の十月一日、建国四十五周年を祝う国慶節の夜、上海の外灘（バンド）一帯は、十年ぶりの花火を見物しようと繰り出した人波でごったがえしていた。河べりに建ち並ぶ旧イギリス租界時代の様式建築がつぎつぎライトアップされ、市内数カ所から色とりどりの花火が打ち上げられると、どっと歓声がわき起こる。着飾った女の子を肩車する若い父親たち。そんな光景を見ていると、この国がついこの間まで、厳しい政治の時代に明け暮れていたことがまるで嘘のように思われる。

この前上海を訪れたのは、一九八八年の夏。以来六年間の変化には、本当に驚くばかりだ。夜八時を過ぎれば真っ暗だった市内は、不夜城さながらのまばゆい街並みに変わり、深夜まで買い物客の流れが途絶えない。ちょうど店開きしたベネトンをはじめ、イタリアやフランスのピカピカのブランド・ショップがずらり軒を連ねている。伊勢丹のほかにも、台湾資本、地元資本の百貨店がいくつも開店し、どこも大変な賑わいだ。道ゆく人びとにも落ち着きがみえる。八八年当時のどこか戸惑い、イライラしたような表情は影をひそめ、街に笑顔が増えたように感じられた。

上海はいま、大規模な再開発の真っ最中である。黄浦江を隔てた旧市街の向かい側、五三三平方キロの広大な「浦東新区」に、金融貿易センター、輸出加工区、保税区、ハイテク技術区、工業区、大規模住宅団地などを建設中だ。外灘を望む一角には、アジア一の高さを誇る上海テレビ塔がすでに完成、新区の象徴となっている。新区は旧市街と二本の大橋、三本のトンネルで結ばれ、一九九七年に香港が返還される頃には、中国の巨大な経済センターとしての全貌を現すはずだ。

上海の再開発と、長江上流・三峡ダムの建設。この二つのビッグ・プロジェクトを目玉に、中国はいわゆるT字戦略（沿海部に加えて長江流域の開発をはかり、内陸部の経済発展をうながすこと）を進めている。内外の投資が集中する上海は、物価も賃金も他の都市の三倍近く、その実力は北京を追い抜いた。もちろん一歩裏通りに入れば、昔の上海との大きな落差も目にできるのだが、そんな矛盾も抱えたまま疾走しているのが中国経済だ。

＊

中国に高度経済成長をもたらした改革開放政策は、人びとにまんべんなく支持されていると言えるが、その受けとめ方はまちまちだ。

「代溝」（世代のギャップ）という言葉をよく耳にした。六十代の老幹部。四十代の文革世代。三十代のポスト文革世代。二十代の改革開放世代……。激変する社会情勢を背景に、中国では十年、いや五年ごとに、まったく異なる価値観をもった世代が登場してくる。互いに円滑な意思疎通をはかるのは、かなり困難なのだという。

五十代以上の世代は概して、このまま中国共産党の支配が続くことを歓迎する。それでこそ自分の老後も保障されるのだ。市場経済の主な担い手である四十代は、政治的には慎重で、改革を歓迎しつつも、アパートの家賃が値上げになったり教育費が有料になったりの負担増に、不満一杯だ。三十代は、共産党の老人支配や腐敗の広がりに強い反感を持っている。子供のころの古い教育と新しい変化とのあいだで、自分の価値観を見失いかけているのがこの世代だ。二十代の人びとは、共産主義にあまり関心も共感ももっていない。そのかわり、外国文化の圧倒的な影響を受けている。上の世代の人びとに言わせると、彼らは中国の現実をわかっていないのだ。最後に、一人っ子世代は、甘やかされて育ちつつあるほんとうの「新人類」。大人になった彼らは、「社会主義市場経済」を発展させようと考えるのだろうか？

＊

こうした世代ごとに、サブカルチャーが形成されつつあるように思う。音楽を例にとるなら、現代の中国ロックを代表する崔健（ツイ・ジェン）は、一九六一年生まれのポスト文革世代だ。文革世代の人びとは、彼の名前を知っていても、聴いたことはないという人が多い。いっぽう二十代の若者たちには圧倒的な人気。崔健自身、子供のころ毛沢東思想で育てられ、もの心がつくと改革開放になってしまった価値観の混乱を、意識していると語っている（小著『崔健――激動中国のスーパースター』岩波ブックレット）。十代の子供たちは、香港・台湾のアイドルを追いかけるのに夢中だが、硬派の崔健は、彼ら若い世代の拝金主義・享楽主義には批判的だ。中国・香港・日本で同時に発売されたばかりのニューアルバム『ボールズ・アンダー・ザ・レッド・フラッグ（赤旗の下の卵）』（東芝EMI）は、こうした中国の文化的・思想的混乱を鋭くえぐる問題作である。権力の座に居すわる老人を批判するなど、歌詞もエスカレート、その衝撃的な問いかけは、十月二十五日から予定されている初の日本ツアーで、耳にすることができよう。

改革開放のかげで拡がりつつある世代ギャップ。「百年揺るぎない」ことになっている改革開放だが、地域間格差に加えて世代間ギャップが十二億の民をばらばらにするなら、ポスト鄧小平時代の中国の舵取りは容易でないことになりそうだ。

（はしづめ・だいさぶろう＝東京工業大学助教授・社会学）

1994-4-7/8

新戦後がやってきた？ 4

夢

笠置シヅ子とドリカム　モノに託した憧れ消えて…

「買物ブギ」は世代を超え共感

敗戦から五年、朝鮮戦争による特需景気が始まったばかりの一九五〇年、関西弁のけたたましい歌が街角にあふれた。三十五万枚の大ヒットとなった笠置シヅ子の「買物ブギ」である。

「鯛（たい）に平目にかつおにまぐろ」「人参（にんじん）大根にごぼうに蓮根（れんこん）」「マッチにサイダーにタバコに仁丹」……。

食品や商品名をカタログ風に連呼するこの歌には、豊かに出回り始めたモノ、新しい消費生活に対する喜びと、ブギウギという新しいジャズのリズムに象徴される米国の文化や民主主義、自由への憧（あこが）れが込められていた。その憧れは老人から子どもまで、あらゆる世代に共有された。

美空ひばりも笠置の歌まねからデビューした。子育てをしながら舞台に立つ笠置の姿は広い共感を呼んだ。

それから約四十年。八九年にデビューした男女三人組ドリームズ・カム・トゥルー（ドリカム）が九一年に歌った「あなたにサラダ」にも、似た歌詞がある。

「トマト、アップル、グリーン・ペッパー、レタス、ウオータークレス、ツナ」……。

主人公が「なるべく背くて楽らかそうな」レタスと「形の揃（そろ）った」トマトを選んで作ったサラダは「世界でいちばん」おいしい。そして歌は「世界でいちばんあなたが好きよ」という二人だけの世界で完結する。

ここでは背景にある豊かな消費生活は自明のこととされ、モノへの憧れは影も形もない。レタスやトマトは二人の食卓という風景画の中の単なる静物でしかない。老人や子どもが託せる夢もない。

笠置シヅ子や美空ひばりは「国民的歌手」と呼ばれた。「国民」が重視された時代の反映と見ることもできる。

笠置シヅ子の歌い踊るブギは、戦後日本の活気と夢の象徴だった。ファン層も幅広く、同郷の南原繁東大総長を会長とする後援会には、吉川英治、林芙美子、梅原龍三郎ら多くの文化人が名を連ねた

価値観対立し支持者は細分化

時代が下って、世代間に価値観の対立が芽生えると、「世代」が「国民」に変わるキーワードになる。音楽もそれに対応し、フォークやロック、ニューミュージックやアイドルなど、特定の世代に支持される「世代的歌手」とでもいうべきものが現れる。

高度経済成長によってモノへの渇望は一段落し、代わってモノの細部にこだわる「差異化競争」が始まる。この時期を代表する歌手松任谷由実（ユーミン）は、スキーやドライブ、避暑地の恋といった素材を取り入れた歌で、少しレベルの高いモノ、少しおしゃれなライフスタイルを提示した。

そして、団塊ジュニア世代の登場で構造はさらに変化する。

法政大学教授の稲増龍夫さんはこの十年、学生に「好きなアーチストを十人挙げよ」とのアンケートを続けている。以前はユーミンやサザンオールスターズが六十人を超す支持を集めて首位だった。が、九二年からはドリカムが首位。だが、支持者はわずか二十二人だった。稲増さんはこれを若い世代の細分化の表れと見る。

「ドリカムはもはや特定の世代や階層の支持母体を持たない。ある時代や社会の共通の価値観、特定の世代の価値観を代弁しない。社会と音楽との蜜月（みつげつ）関係がもう成立しない時代なのです」

同世代の間でも、同じ物語を追う時代は終わった。世代を通した連帯感はもはやない。戦後のメディアと若者のコミュニケーションの変化を研究している東京都立大助教授の宮台真司さんはいう。

「ユーミンらが示してきた相互理解や自己の向上を前提とする恋愛ストーリーよりも、今はシンデレラ・エクスプレスのテレビコマーシャルのような、一瞬の情景の方が好まれる。何事にも没入せず、ロールプレイングゲームのように断片を張り合わせて『快』を生み出し、自己の統一性、統合性を求めない現代の若者のアイデンティティーのありようにも関係する。その反映が、一瞬の情景のパッチワークともいうべきドリカムの歌です」

若い世代の細分化を象徴するドリームズ・カム・トゥルー。左から西川隆宏、吉田美和、中村正人

未来の夢失い歌は自然回帰へ

では、歌謡曲が半歩先の豊かさや半日先の未来の夢を提示して聞き手を引きつけるという構造は、どうなったのだろうか。提示すべきユートピアを失った歌は、等身大の現在を歌い続けるか、郷愁、家族、自然回帰、懐古趣味に走らざるを得ない。

その典型がドリカムの大ヒット曲「晴れたらいいね」だ。相撲と家族とを扱ったNHKの朝のドラマ「ひらり」の主題歌として使われた、故郷に帰って久々に父と外出する娘の歌。外出先は「山へ行こう」である。

ドリカムのアルバム「The Swinging Star」は三百七十万枚売れた。かつては数十万枚でもだれもが口ずさめる「国民的ヒット」になった。だが、いま同アルバム所収の「晴れたらいいね」や「決戦は金曜日」を口ずさめる人がどれくらいいるだろう。

「現代の細分化された文化は、いくら大ヒットになっても浸透する力が弱い」と稲増さんはいう。

「国民」が分解し、「世代」が消え、残ったのは姿の見えない三百七十万人の「分衆」。歌の素材は記号性を失い、情景の中の静物と化す。東京工大助教授の橋爪大三郎さんはこの情景をコンビニに重ね合わせて見る。

「本来は単身生活者を対象にしていたはずのコンビニに、家を抜け出した子どもたちがフラリとやってきて、スナックを買い、雑誌に読みふける。そこではスナックや雑誌はもうコミュニケーションの道具にはなり得ない」

戦後の民主主義への憧れと重なりあってきたモノへの夢は、いま背景の中へ静かに退場しようとしている。

（篠崎　弘）

文化

ブック

『Music Magazine』95年1月号 pp.145

『崔健（ツイ・ジェン）　激動中国のスーパースター』　橋爪大三郎著　岩波ブックレット　400円

93年の春、杭州でマイクロ・バスの中年の運転手に、何げなく「崔健を知ってるか？」と尋ねると、彼はこう言った。「ああ、知ってる。若い人に人気があるね」――その時、崔健の知名度の高さに改めて驚いたのを思い出す。

さてこの本は、現代中国の最も注目すべきロック・アーチスト、崔健のインタヴューを中心にまとめられているが、彼を知るうえで、貴重な資料となることは間違いない。

著者の崔健に対する憧憬にも似た情熱が、このブックレットを上梓するエネルギーとなって言葉のはしばしに溢れている。そして「本当に作りたいものを作る」という純粋な意志に貫かれている本である。

なにしろ著者は、93年の八王子の崔健のライヴのとき、自ら楽屋にまで押しかけて本を出したいと申し出ているとのことであるから、気の入れようは、生半可ではない。

――本の構成は、著者の文章と合わせて、4項目のインタヴューから成り立っている。さらに崔健の経歴を年表にしたもの、中国ロックのテープ及びCDの紹介、また彼の主要作品の日本語訳も掲載されており、かなり参考になるのではないだろうか。

崔健の発言で、印象に残った部分を列挙しておこう。

まず、彼は、政治的、文化的状況に関してすぐれた観察眼をそなえていること――そして彼の立脚する場が明確に提示されている点である。

それは次のような言葉に現われている。――《ロック音楽というものはいつでも社会のなかの、人びとに不満を抱かせるものを批評するものなのだ》《俺の音楽は、人びとに自分自身を見失わせる一切のものに、反対するということなんだ》――後者は、古い言い方をすれば「疎外」への意志表示であろうか。

また「できる限り単純なかたちでメッセージを伝える」という創作の方法論を基盤に据え、あくまでも一人の「表現者」であり続けようとする崔健の思いの中に、その志の高さがうかがわれる。

この本は、崔健の紹介が目的ではあるが、それのみならず、ロックを媒介とした現代世界の的確な情勢分析となっているところが大変興味深い。――そして中国をひとつの軸とした巨大な動きは、もはや誰にも止められないということを再確認させられるのである。

吉野大作

1994-4-8/8

毎日新聞（夕刊）

1994年（平成6年）12月28日（水曜日）

「この1年」を振り返る

1994年も残りわずか。この「文化 批評」と装幀・編もきょうが今年最後の紙面です。今年も毎月「雑誌を読む」で時代がかかえるさまざまな問題を話し合っていただいている3人の方に、この1年を振り返ってもらいました。新年は4日から再開します。

過渡期にある民主政治

細川→羽田→村山と、つぎつぎに首相が代わったこの一年。社会党の連立離脱、公明党の解党、新進党の結成と、日本の政局は大きく動いた。にもかかわらず、国民はしらけている。日本新党や新生党がブームだった去年が、嘘のようだ。

ブームを作りだしたのも、ブームをしぼませたのも、小沢一郎氏という政治家である。彼が自民党を割ることで、非自民連立政権が誕生し、国民はそれを支持した。しかしその強引な手法に、社会党が決裂を分かち、新生党内部にも亀裂が生まれ、船出したばかりの新進党はきびしい逆風にさらされている。

選挙制度改革法案が国会を通過し、懸案の政治改革がようやく具体化した――はずだったが、騒いでいるのはつぎの選挙が心配な国会議員だけ。どの政党も似たりよったりになって、有権者は選択にとまどうばかりだ。

ここ数年の政局をリードしたのは、小選挙区制をにらんで手を結んだ小沢一郎氏と公明党の市川雄一氏の「一・一ライン」だった。その戦略を、私はこんなふうに分析している。

小沢氏はまず、日本の政治をまともに機能させることが最優先課題だと考えた。冷戦の落とし子である保守／革新の対立にかえて、政策をかかげて戦う二大政党の登場こそ、望ましい。そのために必要なのが、中選挙区制の廃止＝選挙制度の改革だ。これを成功させるには、自民党と互角以上に戦える政党を、急いでつくり出す必要がある。それには、各選挙区でまとまった票を集められる公明党と組むのが現実的だ。公明党も、中選挙区のもとでは政権に手が届かない。かと言って、小選挙区では単独で戦えないから、どこかと提携するしかない。こうした思惑の一致が、一・一ラインを生み出した。

この方向は、大筋で正しかったと言えるだろう。小沢氏の矛盾は、新しい政治を実現するのに、古い政治手法に頼ろうとする点にある。そもそも小沢氏はなぜ、首相にならないのか？

つぎつぎとする小沢氏は、二大政党制のルールをみずから踏み外している。だから国民は新進党に失望したのだ。

もうひとつ、選挙制度改革のかげに隠れているが残念に思うのは、政党の公費助成が始まることである。

「政治に金がかかる」ことを制度が認めたのは、一歩前進である。だがその金を、税金でまかなえばいいとしたのは安直だ。これでは、ボス議員から陣笠議員への金の流れ（派閥）はなくなるかもしれないが、その代わりに、党の金庫を一手に預かる党官僚の力が強大になろう。政党政治の生命である党内民主主義が、窒息してしまいかねない。

橋爪大三郎氏

国会がまともな政治の場になるためには、議員の討論が法案の成否を決めるのでなければならない。「党議の拘束」などさっさとやめる。それには議員が、政党のボスでなく選挙区のほうを向いている必要がある。政治資金の面でも議員一人一人が自立しないとだめだ。

有権者が票だけでなく、政治資金もいっしょに出せば、この問題は解決する。選挙区で予備選挙をやって、党員チケット＝予備選挙の投票券を売りさばく。予備選挙を勝ち抜いた候補者は、自動的に政治資金も集まる仕組みである。こういう下から上への金の流れをつくり出すことが、政治腐敗を根絶し、まともな政治を取り戻す決め手であろう。

今回の制度改革は、こうしたやり方の芽を育てるものだとは思うが、新進党の党風はだいぶ違うようだ。公明党は地方組織を分離・温存し、小沢氏の構想にも狂いが生じた。彼はいろいろな意味で、過渡期にある日本の民主政治を象徴する人物だと思うのである。

（はしづめ・だいさぶろう＝東京工業大学助教授・社会学）

週刊読書人

1994年（平成6年）12月16日（金曜日）

アンケート特集 一九九四年の収穫

橋爪大三郎

森嶋通夫『新しい一般均衡理論――資本と信用の経済学――』（安富歩訳、創文社）。戦後の理論経済学が、数学的な純化をとげるなかでそぎ落としてきた、時間や資金的制約といった要素を組み入れた新しいモデルの提案。著者のいつまでも若々しい創造の熱気が伝わってくる。

鈴木光男『新ゲーム理論』（勁草書房）。ゲーム理論のパイオニア的存在である鈴木氏が、旧著『ゲームの理論』以来のこの分野の発展を整理したもの。非協力ゲームと協力ゲームを中心とした、ますバランスのよい入門書。

山崎敬一『美貌の陥穽――セクシュアリティのエスノメソドロジー――』（ハーベスト社）は、日本のエスノメソドロジー研究（会話分析）の水準をうかがうに足る好著。日常の言語使用が、既存の社会関係の反映であると同時に新たな社会関係を生みだす契機でもあるというダイナミズムが、丁寧に描き出されている。（はしづめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学助教授・社会学専攻）